

# 序

「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」

剣豪でもあり、第9代肥後藩主であった松浦静山の言葉ですが、臨床研究においても同じことが言えます。

本書を手に取られた読者の中には、例えば「もっと統計の知識があれば、臨床研究ができるのに…」と考えて、多くの教科書を読んだり、講演を聞いたり、セミナーに参加している方も多いかもしれません。しかし、それで上手く研究を実施できるようになったと本当に言えるでしょうか？上手くいかないのは、「知識やスキルさえあれば」という考え方方が間違っているからかもしれません。その理由を理解していただくため、本書は、総論の冒頭で説明がある福原俊一先生の「独立した臨床研究者になるための6つの要件」を基礎になる理論として、これまでの臨床研究の関連書籍で重視されてきた「知識やスキル」以外の点にもスポットライトを当てました。

本書は、単に理屈を解説するだけでなく、数多くの研究事例とその舞台裏を紹介しています。第1章では、さまざまな臨床現場で活躍する若手医療者に登場していただき、「6つの要件」を各自がどうやって乗り越えたかを、実際の臨床研究の事例を交えながら説明していただきました。第2章では、研究結果を形にするために必要な学会発表のやり方、論文の書き方などについて解説しました。そして第3章では、さらに個別の研究デザインに踏み込んで、サーベイ研究、系統的レビュー、診断精度研究について、臨床現場でどう実践するかを実例をもとに解説しました。事例紹介にあたっては、メンターの視点からコメントを入れることで、理論的な裏付けもしました。さらに第4章では、少し難易度の高い中級者向けの研究をご紹介しました。

「これまで臨床研究をなんとなくやってみたけれど上手くいかない」「教科書を読んだり、セミナーに参加したのに研究ができない」「後輩の研究指導をやることになったけれど、どうすればいいかわからない」といった皆さんの悩みが、本書を読むことによって解決し、「継続的に研究を実施できる環境づくり」に役立つことを願っております。

2021年11月

片岡裕貴、青木拓也